

島尾敏雄全集

しまお としお ぜんしゅうたい かん
島尾敏雄全集 第5巻

一九八〇年一月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二一

電話東京二五五局四五〇一(代巻・四五〇三)編集

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1980 Toshio Shimao

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〔検印廃止〕落丁・乱丁本はお取替えいたしません

島尾敏雄全集

第 15 卷

ブックデザイン
平野甲賀

島尾敏雄全集第15巻・目次

或る光景	17
中村地平さんのこと	20
二枚橋	23
選ぶことの鬱屈	25
わたしの文章作法	29
石橋理著「永遠の常識」	33
ドストイェフスキイ知らず	36
出水の縁	39
庄野潤三著「前途」	40
南日本新聞・新春短篇小説選評（昭和四十四年度）	42
「琉球弧の視点から」後書	43

妻と犬

盗み足で近づくもの

螺旋回転

プレス・ビブリオマーマヌ本「帰巢者の憂鬱」への

添え書

南日本新聞・新春短篇小説選評（昭和四十五年度）

日々のたたかい

幻の友

事故

特攻兵器・震洋と私

南日本新聞・新春短篇小説選評（昭和四十六年度）

安岡章太郎との通交

詩人のへだたり

幼時体験

吉行淳之介のこと

71 68 66 62 61 59 58 56 54 53 52 50 48 44

中蘭英助のこと	72
宮崎の中村地平さん	73
クマ	76
わたしの城	78
私の中の中央アジア	79
一時期	82
唐十郎の事	84
中里介山の「大菩薩峠」	84
病身	85
般若の幻	87
交遊の端緒	90
南日本新聞・新春短編小説選評（昭和四十七年度）	93
ことしこそ	95
渡辺外喜三郎の「中勘助の文学」	95
大岡昇平の「レイテ戦記」	98

「硝子障子のシルエット」あとがき

サド無縁

回顧

長尾良さんを悼む

或るえにし

吉本隆明との通交

安部公房との事

「東北と奄美の昔ばなし」はしがき

「文芸賞」選評（昭和四十七年度）

南日本新聞・新春短編小説選評（昭和四十八年度）

第一回「南日本文学賞」選評

「記夢志」あとがき

松岡俊吉の事

「東北と奄美の昔ばなし」あとがき

一魚会のこと

「光輝」の頃まで

昔ばなしの世界

限定版「島の果て」あとがき

弓立社版「幼年記」あとがき

「文芸賞」選評（昭和四十八年度）

小川国夫著「或る聖書」

南日本新聞・新春短篇小説選評（昭和四十九年度）

馬

ポオの家

田舎

二つの海からの光

うしろ向きの戦後

島尾ミホ「海辺の生と死」序文

嗚呼！ 東北

カニシバ

176 175 173 166 163 159 157 153 151 149 147 145 144 136 133

田舎の馬

奥六郡の中の宮澤賢治

「日本の作家」後書

二十九年目の死

小川国夫の衝迫

刀傷

井上岩夫さんの詩集に添って

「文芸賞」選評（昭和四十九年度）

南日本新聞・新春短編小説選評（昭和五十年度）

一九七五年の西日本への提言

日記から

近況

司書との訣別

「春の日のかげり」の周囲

純心生の印象

就任の挨拶	248
多少の縁	250
指宿日記	252
わたしの戦後	256
刹那の景色	260
私にとっての悪文	263
二月田での思い	264
海の旅	268
第一回「新沖縄文学賞」選評	272
「文芸賞」選評（昭和五十年度）	274
長谷川四郎全集の事	276
南日本新聞・新春短編小説選評（昭和五十一年度）	277
薩摩女考	279
長崎の印象	281
想像力を阻むもの	283

	「硝子障子のシルエット」について	296
	志賀直哉と私	299
	檀一雄の死	302
	閑荘年子の事	306
	J・ドロルム「マルコス福音書の読み方」推薦文	308
	奥野健男著作シリーズ推薦文	308
	硝子障子のシルエット余話	309
	「つげ義春とぼく」書評	310
	枕崎紀行	313
	中島敦と南島	326
	「南島通信」後書	330
	夢野久作の甦り	331
	私も口ひげを！	333
	「つげ義春作品集」	335
	「内にむかう旅」あとがき	337

「日の移ろい」あとがき

武田泰淳さんの存在

「文芸賞」選評（昭和五十一年度）

私の埴谷体験

「夢と現実」後記

今年の回顧

南日本新聞・新春短編小説選評（昭和五十二年度）

第二回「新沖繩文学賞」選評

死火山の甦り

殿様湯跡界限

私の中の日本人

前山光則「この指に止まれ」帯文

心に残る一冊の本

工藤幸雄「ワルシャワの七年」推薦文

「近代文学」と私

海のうねり

奥野とのつき合い

文学的近況

「日曆抄」後記

終の住処

つるべ

武田百合子「富士日記」

カフカの癒やし

「文芸賞」選評（昭和五十二年度）

南日本新聞・新春短編小説選評（昭和五十三年度）

湯船の歌

南の糸

私の近況

南島世界を見た私

小川国夫「アポロンの島」解説

382

388

391

397

398

401

403

404

414

416

418

421

425

426

429

埴谷さんとのつき合い

原作者からの思い

「群像新人文学賞」選評（昭和五十三年度）

日本文学大賞受賞の言葉

散歩道の先取り

特攻隊体験

井上岩夫「大島遙小説集Ⅰ」推薦文

純心学園の思い出

「南風のさそい」あとがき

444 442 441 439 437 437 435 434 431

の上に投げ落とした。そつと手加減をしたつもりだったが、子之吉は、ううつと、へんなうめき声を出し、そのままうずくまった。

巳一はしばらくぼやつと、うずくまって静かになった子之吉の小さなからだを見下していた。それから、はつと気を取り直し、祈るような気持で、子之吉の顔を起してのぞき込んだ。

子之吉は、きょとんとしていた。

巳一は子之吉のあごに手をかけて、口をこじあけてみた。

舌がぶらつとたれ下つて来た。

「おい、ナス、いけない。舌をかんでいる」

ナスは蒼褪めてさつと立ち上った。

巳一の頭の中で、時の流れがぶつ切り切れた。

「早くしろ、早くしろ」

とあわててしまっている自分をもどかしく、何を早くしろだか分らないが、ナスと自分をせかしなから、巳一は四畳半の自分の部屋にはいつて、外出の洋服に着換えようとした。

ワイシャツがうすよごれているな、と思いつながら、どうしていいか分らず、ネクタイを首に巻きつけてもうまく結べず、いやこんなことはどうだつていいんだ。今すぐしなければならぬことはもつと別のことだ。子之吉、舌を飲み込んだじゃいかんぞ。しかし子供は自分のやろうとしていることがどんなことか分らないのだから困つたもんだ。ぶらぶらして気持が悪いものだから飲み込んでしまうかも分らない。そうすると死んでしまうかな。その所は一体どうなのか。舌を噛み切ると死ぬという

文学エッセイⅢ

1968—1978